

■鈴木重胤 国学者。平田篤胤を信奉して研究するうち、その説の否定に転じ、鉄胤から絶交され、暗殺された。

すずきしげたね

高田屋拿捕・1812＝ 淡路国津名郡仁井村の庄屋の五男に生まれる。

水野忠成老中1818＝ 6歳：

伊能図完成・1821＝ 9歳：

父の薫陶により国学に志し、

異国船打払令1825＝13歳：父が死去。傾きつつあった家産の回復をはかるため、大坂の商家鴻池善右衛門に見習いとして住み込み、

シボム事件・1828＝16歳：3年ほどでいったん帰郷、再び家郷を出て次には神戸の商家橋本藤左衛門の保護を受けた。
のち神戸の商家橋本藤左衛門の世話になる。この間、父の遺訓を守って、商売よりも国学の道に励み、

富籤流行・・1830＝18歳：

鼠小僧磔・・1832＝20歳：平田篤胤に入門名簿を送り、書信をもって教えを受け、

高島砲術・・1834＝22歳：大坂に移住してきた大国防正に入門すると、頭角を現し、

大塩平八郎乱1837＝25歳：橋本家を去り帰郷したが

蚕社の獄・・1839＝27歳：再び大坂に出、門戸を構えて和歌を教授。

順天堂始・・1843＝31歳：御所内侍所参拝後、懇意の花山院家厚を訪ね、屋敷内の宗像神社に詣でて、自らの言葉が一気に迸り始め
て宗像信仰に開眼すると、平田篤胤と面会したいという宿望を果たすため秋田行を決意、母への暇乞いのた
め帰郷後、出立して目的地に着いた時には、篤胤がすでに病没、その霊前で没後門人となった。

天保改革終・1844＝32歳：江戸日本橋村松町に居を定め著作活動に努める一方、越後・出羽・九州など各地を旅行して学説を弘め、
特に出羽庄内の酒造家大滝光憲、越後新津の豪農桂普重をはじめこの地方の民間有力者の信奉を受け、

阿部正弘首座1845＝33歳：光憲の次子光俊を養子に迎え、
庄内には1年あるいは2年を隔てて講説に赴く。

・・・・・1848＝36歳：篤胤に倣って古典の選定を試み、神代から神武天皇までの「神世之語草」を著わし、その伝たる「古始大元考」
の完稿を目指す。また、「延喜式祝詞講義」「中臣寿詞講義」を起稿、

この間、次第に篤胤学批判を前面に押し出す。生来敬神の念が厚かったが、秋田への出立に際し花山院家
邸内の宗像神社に参拝したのを契機に宗像信仰を強め、とくに宗像の大神に対する信仰は顕著で、

ペリー来航・1853＝41歳：完成すると、庄内に出向き光憲の学舎賢木舎に門人を集めて完稿奉告の祭事を執行。帰宅後まもなく、畢
生の大著「日本書紀伝」を起稿、

開国開港・・1854＝42歳：筑前の宗像神社まで参詣、

安政大地震・1855＝43歳：江戸本所小梅に自宅を構えて定住。

松下村塾・・1856＝44歳：「日本書紀伝」を著述する過程で、篤胤の学説を剽窃したと疑われて、篤胤の子鉄胤と不和になり、師隆正
らの仲介も空しく、数回の応酬ののち、

蕃書調所・・1857＝45歳：鉄胤から絶交を通告され、

五ヶ国条約・1858＝46歳：自らの立ち位置を確認すべく、筑前の宗像神社を参詣し始め、

桜田門外変・1860＝48歳：再び、参詣、「妙見宮鄙説」を著す。

生麦事件・・1862＝50歳：三度、参詣、巡礼日記「筑紫四歴」を遺す。敬神尊王を説いて、長州の白石正一郎らに影響を及ぼすが、

8月18日政変 1863＝51歳：居住していた江戸本所小梅町の自宅で何者(平田派の門人ともいわれる)かのために暗殺され、代表的著作
と称すべき「日本書紀伝」は未完に終わった。